

「順番、順番！」

(黒柳徹子著「トットちゃんとトットちゃんたち」 第一章タンザニア・1984年講談社より)

タンザニアのなかでも、とくに干ばつ^{かん}のひどいドドマ地区を訪ねたときのことでした。もう8ヶ月間、雨が一滴^{いってき}も降っていないというこの土地は、見渡すかぎり、何も生えていませんでした。

トウモロコシ畑も、何もかも枯^かれていました。土は、手で触^{さわ}ると表面が20センチくらいカサカサして、そんな、ほこりのような乾^{かわ}いた土が、風に吹かれていました。湿^{しめ}り気というものは、どこにもありませんでした。

私の手が土で汚^{よご}れていたので、お洗^{なべ}いください、と親切な女の人が小さなアルミのお鍋^{なべ}に水を入れて持^もってきてくれました。でも、その水は、手を入れると手が見えなくなるくらい、ミルクコーヒー色^{にこ}の濁^{にご}った水でした。

「このお水、どこから汲^いんでいらしたんですか」と私は聞きました。

「裏の井戸^{いど}です」

私は家の裏にまわってみました。井戸はありませんでした。

「いま、裏の井戸とおっしゃいましたけれど…」私がそう言うと、その女性は答えました。

「5キロ先です」

私は、本当にびっくりしてしまいました。

「裏の井戸から汲^いんだ水です」と、日本で聞いたら、ふつうは、家の裏の井戸と思うでしょう。

でも、その人は、5キロも離れたところの井戸から汲^いんできた水で、もてなしてくれました。

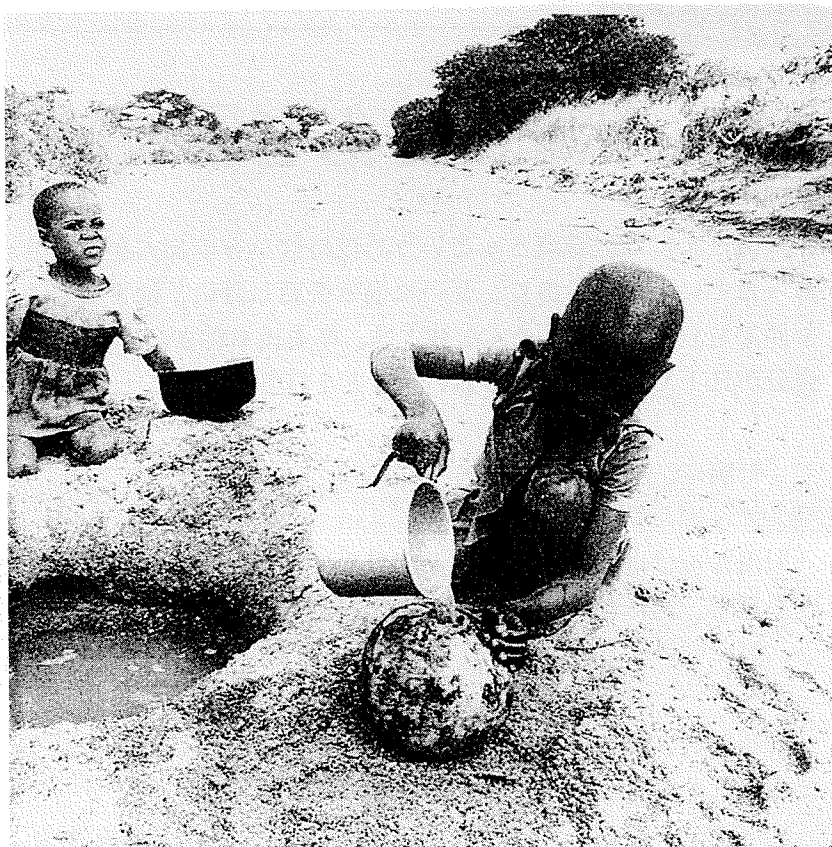
しかも、その井戸の水は、こんなに濁^{にご}った水なのです。私がびっくりしていると、私を案内してくださっていたドドマの女性国会議員^{かた}の方が、強い声でいいました。

「5キロなんて近いほうなんですよ。遠い人は、15キロも水を汲^いみにいきます。それでも水があるから生きていけるんです!」

子どもが頭の上に水の壺^{つぼ}をのせて、だだっ広い枯^{かわ}れた野原を一人で歩いている写真などを見ると(可愛いなあ)と思ったりしますが、水汲^いみも子どもの仕事です。子どもたちは、干ばつで何もかも枯^{かわ}れはてた荒野を、近くて5キロ、遠ければ15キロも、川や共同井戸まで水を汲^いみに行かなければならないのです。

子どもたちは本当に、よく働^まきます。水を汲^いみ、薪^{まき}を拾^いい、弟や妹の世話をします。ですから小学校は義務教育^{いそが}といっても、家の手伝い^{いそが}が忙しくて学校に行けない子どもたちが、たくさんいるのです。

帰るとき、車に乗っていたら、突然、ひどく、ガタガタしました。聞くと、そこは、前は大きな川だったのに、水がまったくなくなって道になってしまった、というのです。川の形のまま、少し曲がりくねって、水がまったくなく、というのも、怖い風景でした。私たちは車から降りま



しました。子どもたちが集まってきて、「ここから水が出る」と

いいました。どうしても水が飲みたくなるときは、井戸が遠いのでここに来るのだといいました。そこで、「どうしても水が飲みたくなるときには、どうするか」を見せてもらいました。

まず、子どもたちが何人かで、手で地面を掘って、深さ30センチ、直径40センチくらいの穴をつくりました。しばらく待っていると、なるほど、もと川だけあって、下から水がジワーッとわいてきます。始めは穴のそこが濡れる程度なのですけれども、気長に待っていると、少しずつ溜まってきます。

10分くらいたつと、水は小さいボウルに2杯ぐらい溜まりました。

子どもたちは、手馴れた手つきで表面のほこりや、ごみをアルミのボウルでしゃくって捨てて、水を飲みました。それでも半分は泥でした。そのとき驚いたのは、子どもたちが、小さい子どもから順番に飲んだことです。「順番、順番!」といいました。こんな、ひどい状況の中でも、小さい子から、という、やさしさに、胸がいっぱいになりました。子どもたちは、おいしそうに、のどをならして飲みました。

水道の蛇口をひねれば家の中で水が出る日本。(水のありがたさに気がついていなかった)。知らなかったとはいえ、私は恥ずかしくて、お行儀よく順番に、泥が混じっている水を飲んでいる子どもたちを見つめていました。